

---

# 就学前子育ての場における 多文化社会コーディネーターの必要性と役割

## The Necessity and the Role of the Multicultural Society Coordinator in the Field of Preschool Child Rearing

安藤 陽子\*  
ANDO Yoko

---

This paper is a study of the necessity and the role of Multicultural Society Coordinator in the field of preschool child rearing.

I am mother of a two-year-old boy. Through my own child rearing, I have become aware of the problem of the present situation in which there is difficulty in cultivating friendships and exchanges between Japanese parents and foreign parents. Therefore, in May 2014, I established a NPO with two others mothers, each who have children in preschool and the same consciousness of this problem, and began actions for making communities in which multicultural parents support each other without worrying about differences in languages and cultures.

I wrote this paper by using and reflecting on the lessons I learned from my first year. Especially, I paid attention to the point of whether or not the practices began any transformations by having learned the perspective of “the introspective practitioner” in the “Multicultural Society Coordinator Training Lecture” carried out by Tokyo University of Foreign Studies Multilingual & Multicultural Research Center.

The first section outlines the current state of contact between Japanese parents and foreign parents in the field of preschool-aged child raising. The second section is

---

\*多文化共生子育て情報局 代表

a description of the NPO. The third is an introspection of the “Nihongo Mama Cafe” which I implemented while I was groping in the dark for a better way. Fourth is an introspection of the “Supporters of Foreign Mothers Assembly”. Lastly, the fifth section is a conclusion on the necessity and the role of a multicultural society coordinator for the field of preschool child raising.

## はじめに

2012年3月、筆者は結婚を機に、親戚・知人もいなければ土地勘もない東京都新宿区に住むことになった。翌年2月に長男を出産。子育て中心の生活が始まった。

それとほぼ歩みを同じくして、一介の母親である筆者が「多文化共生」を自分の事として考えるようになり、息子が1歳になって間もなくNPOまで立ち上げた。その動機を一口で説明することはできないが、ある2人のママ友との会話を抜きにしては語れない。

1人は、子ども家庭支援センター<sup>1</sup>(以下、家庭支援センター)主催のママ友づくりのプログラムで親しくなったYさんである。初めての育児に追われて身だしなみを振り返る余裕すらなかった筆者には、メイクもファッションもセンスよく決めているYさんが輝いて見えた。筆者は憧れをもって声をかけたのだが、Yさんは笑顔で応じつつ流暢な日本語でこう言ったのだった。

「中国人と友だちになりたいなんて、珍しいねえ」

この時の切なさを一体どう表現すればいいのだろう。筆者は、このさりげない一言を聞き流せなかった。そこで交流したママたちが再会する機会を度々作ってくれるほど社交的なYさんにさえそう言わしめる空気が、この日本社会には確かにあるのだ。以来、悶々としていた筆者を凍りつかせたのは、日本人のママ友Tさんの話である。

「外国人の子に税金を使うくらいなら日本人の子にもっと使ってほしいと話すママ友は多いよ。外国人の子が多い小学校を嫌がって遠方に通わせる人もいる」

とっさに返す言葉もなかった。無限の可能性をもつ子どもを産み育てる私たち母親が身近な人々の多様性に価値を見出せずして、どうして平和な社会を築いていけるだろう。

私たちは子育てという世界共通のロマンの担い手であるにも関わらず、差異へのこだわりを克服して共感の輪を広げる好機を逃しているのではないか。

こうした出来事から筆者は「多様な保護者が言語や文化の差異を超えて、共に支え合いながら子育てできるコミュニティをつくりたい」と強く感じるようになり、2014

年5月、同じ課題意識をもつママ友2人と共にNPOを発足。試行錯誤を開始した。当初は単なる「子育て当事者」として闇雲に活動を始めたのだが、ほぼ同時進行で、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターが実施する「多文化社会コーディネーター養成講座」で省察的実践者の視点を学び、実践の意義を問い続けながら、より良い方向性を見極めていく軸足を定めることができた。自らを「多文化社会コーディネーター」として捉え直すことで実践は大きく変容し、地域の人々と協働する道も開けてきた。

そこで本稿では、就学前子育て当事者だからこそ見えてきた課題、実践1年目に得られた教訓やヒントを手がかりに、なぜ今、就学前子育ての場で多文化社会コーディネーターが必要なのか、その役割とは何かを論究する。

第1章では就学前子育ての場における日本人保護者と外国人保護者の接触状況を概観する。第2章ではNPOの概要を示す。第3章では暗中模索のまま実施してきた「ほんごままかふえ」（以下、ままかふえ）を、第4章では自らをコーディネーターとして捉え直し実施した「外国人ママを応援する支援者交流会」（以下、支援者交流会）を省察し、第5章でコーディネーターの必要性と役割を論じることとする。

## 1. 就学前子育ての場における日本人保護者と外国人保護者の接触状況

本章ではまず、筆者の経験に基づき、就学前子育ての場における日本人保護者と外国人保護者の接触状況を概観する。

前述のママ友2人の言葉に衝撃を受けた筆者は、「まずは自分自身が多様なママ友をつくり、理想論ではなく実体験をもって、その価値を伝えていこう」と考えた。しかし、これが想像以上に難しかった。

新宿区は住民の9人に1人が外国人という屈指の外国人集住都市である<sup>2</sup>。そのうち就学前の子をもつ外国人保護者が何人いるかは、統計データがなく定かではない。そこで0～6歳の外国人人口を抽出してみたところ、2014年4月1日現在1135人で、子ども総合センター（以下、総合センター）・家庭支援センターの管轄別に整理すると、少ない地域でも80人、多い地域では365人以上の就学前児童が住んでいることが分かった（外国人の親をもつ日本国籍の子どもは含まれていない）。

しかし、もとより好奇心旺盛で、妊娠中から地域の様々な場所に足を運んできた筆者でさえ、外国人母親と出会い交流する機会はYさんを除いてほとんどなかった。では、一体どこに行けば外国人母親と出会い、交流できるのだろうか。

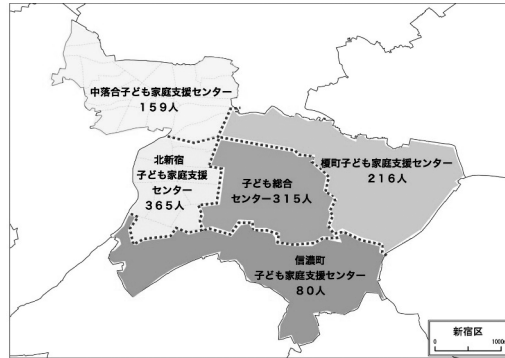


図-1. 新宿区に住む0～6歳の外国人人口 2014年4月1日現在  
 ※新宿区住民基本台帳人口 町丁別男女別年齢（1歳階級）別人口より筆者作成

### 1-1. 日本人保護者不在の「多文化共生推進」の場

まずは、新宿区が「外国人と日本人の交流の拠点」として2005年に開設した「しんじゆく多文化共生プラザ」を訪れて相談してみたが、日本人、外国人ともに就学前の子をもつ保護者が同プラザを訪れることは減多にないという。確かに、歌舞伎町の繁華街にあり、乳幼児連れでは足が向きにくい。毎月1回の国際交流サロンは平日夜間の開催である。同プラザを含めて区内10か所で開催されている「新宿区日本語教室」は、ボランティアは子連れ不可。学習者は「『他の学習者に迷惑がかからないよう自己責任で』が原則。実際には乳幼児連れはいない」とのこと。そのほか、ボランティアによる日本語教室は「子連れ可」が12か所中3か所のみ。うち託児があるのは「外国人のための親子日本語教室」（新宿虹の会と新宿未来創造財団の共催。以下、虹の会）1か所のみであった。

そこで筆者は、NPO発足と同時期の2014年5月より虹の会にボランティアとして参加。様々な外国人保護者と交流を重ねるようになった。約1年経た今、そのうち数人とは子どもの写真をメールで交換したり、子連れでお茶をしたり、公園で一緒に遊ぶ仲である。ただ、外国人保護者の多くは、話を聞く限り、日本人保護者との交流はまったくくない様子である。ボランティアのうち、就学前の子をもつ日本人保護者が筆者を含めて2人しかいないことも気になった。

### 1-2. 日本語ができない外国人保護者不在の「子育て支援」の場

そこで総合センターと各家庭支援センターを訪れ、外国人保護者の利用状況について話を聞いた。全5か所とも国籍別に利用者を把握していないため明確な利用人数は

不明だったが、①利用登録書類、②プログラムの案内、③館内掲示物のいずれも多言語化しておらず、認識としては「日本語ができない外国人保護者の利用は減多にない」という。また、これらの施設と連携関係にある保健センターを訪ね、母親学級、両親学級および食事講習会の①外国人乳幼児の参加状況、②お知らせの多言語対応、③当日の通訳配置を確認したところ、①は統計がなく回答不可、②と③はいずれも「無し」だった<sup>3</sup>。

### 1-3. 人々の関心・問題意識

こうした現状を他の人々はどう思っているのだろうか。課題と感じているのは筆者だけなのだろうか。周囲の人々の関心や問題意識を探ってみた。

#### (1)外国人ママ友の反応

冒頭で紹介した中国人のママ友Yさんは、前述の通り日本語上級<sup>4</sup>者で、家庭支援センターをよく利用している(日本語上級者でも外国人保護者の利用は珍しい印象を受ける)。それでも時折「陽子さんはいいなあ、ママ友が多くて」とか「日本人のママはなかなか連絡先を交換してくれませんよ。だから家にも遊びに来てもらえない」と筆者に漏らす。そこで、後述する「ままかふえ」に誘ってみたり、何か一緒に活動できないかと感触を探ってもみたが、多文化共生の推進にも、子育てサークルの活動にも、まったく関心がなさそうである。「子どもの世話で手一杯で、それどころではない」というのが一番の理由だったが、「営利目的で近づいてきた中国人がいて嫌な思いをした経験がある。中国人のママ友は今いるだけで十分」という話も出た。

また、フィリピン人のママ友Jさん(日本語上級)は「日本で子育てする外国人保護者のために動いてくれる日本人保護者なんて他にいない。是非とも頑張ってくれたい」と期待を寄せてくれ、「ままかふえ」のチラシの翻訳にも一役買ってくれたのだが、3人の子育てとフルタイムのパート、さらには生活上で困難な問題を抱える従妹(フィリピン人、就学前の子をもつ母親)のケアもあり、共に活動できる状況にはない。また、Yさんと同様「トラブルが起こりやすいので同国人が集まりそうな場には参加したくない」とも話していた。

#### (2)日本人ママ友の反応

一方、日本人のママ友から、新しく立ち上げる読み聞かせサークルの運営に加わって欲しいと声が掛かったので、企画会議の場で「外国人保護者も参加しやすい工夫をしてみてもどうか」と提案してみた。ピンと来ていない様子だったので、区内に多く

の外国人保護者が住んでいることを説明し、やさしい日本語<sup>5</sup>や多言語での広報・企画・運営についてアイデアをいくつか話してみた。JICA（独立行政法人国際協力機構）OGの1人は共感を示してくれたが、他の3人は、外国人への否定的感情は無いものの関心や課題意識も無さそうで、残念ながら採用されなかった<sup>6</sup>。

筆者と同様に外国人の親しいママ友がいたり、日本語教育を専門とする日本人ママ友で、共感を示してくれている人も数名いたりするが、子どもの行事、仕事、家庭の事情で忙しく、現段階では共に活動できていない。

### (3)子育て支援者の反応

総合センター・各家庭支援センターには「日本人保護者だけではなく、外国人保護者も参加しやすく多様性を楽しめる活動をしたいのですが、既存のサークルやプログラムはありますか」と尋ねてみたが、現状ではそのようなサークルやプログラムを行っているところはなかった。

新規サークルとして会場を借りられるか否かも相談した。了承してくれた家庭支援センターはアクセスが悪く、筆者自身が子連れで通うには無理があり断念した。さらに外国人住民が特に多い地域にある児童館にも相談したところ、館長が「試みても良いとは思いますが、外国人であることを隠している利用者もいますので難しいかもしれません」と率直に話してくれた。そのほか「大切な視点ですね」と共感を示してくれたところもあったが、どの時間枠も既存の（つまり参加者は日本語上級であることが前提の）活動で埋まっていて、新しいサークルに会場は提供できないという。

以上が、筆者が「子育て当事者」として地域の人々と対話する中で実感した「日本人保護者と外国人保護者の接触状況」である。ポイントを以下にまとめる。

- ①就学前子育て支援の場では「参加対象者＝日本語話者」が常識になっている。それが日本人母親の一般的な認識にもなっていると考えられる。
- ②関心や問題意識はあるが、多忙で動けない日本人母親・外国人母親もいる。
- ③過去のトラブル経験から「同国人とは付き合いたくない」と考え、多文化共生を推進する場に足が向かない外国人母親もいる。

このように、新宿区では多文化共生を推進する場にも子育て支援の場にも、就学前の子をもつ日本人保護者と外国人保護者が出会い交流する機会は滅多にないと言ってよいだろう。

## 2. イクリスの発足

本章では、筆者が実践のパートナーと出会い、共に発足したNPOの概要を記述する。

### 2-1. Cさん、Mさんとの出会い

実は、前章で述べた子育て支援関係者の反応の一部は、筆者が大学院生の立場でヒアリングを行った結果、得られたものである。1人の子育て当事者として外国人母親と交流する難しさを痛感し始めた筆者は、この見えない壁を乗り越える手がかりを求めて、2014年4月、大学院の門を叩いた。子どもを預けてまでやるべきことかと葛藤は尽きなかったが、筆者はここで幸運にも思いを共有できるCさん、Mさんと出会ったのである。奇遇なことに3人とも30代半ばで0～1歳(当時)の第1子を持つ母親。多文化共生に関する研究をしながら、実践の場を模索していた。

### 2-2. 多文化共生子育て情報局(イクリス)

2014年5月、筆者はCさん、Mさんと共に「言語や文化の差異を超えて、誰もが安心して子育てできる地域づくり」をコンセプトに「多文化共生子育て情報局(Intercultural Child-Rearing Information Station)」(以下、イクリス)を発足した。趣旨は『『支援する者／支援を受ける者』という関係性ではなく、『ママ友』『パパ友』として、日本人保護者も外国人保護者も共に支え合いながら子育てできるコミュニティづくり』である。

メンバーには共通項が3点ある。第1に、初めての育児に奮闘する中で、身近にママ友がいるありがたさを痛感している。母乳、離乳食、予防接種、病気の対応、遊び場、保育園・幼稚園選び……。どれをとってもママ友の口コミ情報に助けられている。第2に、外国人のママ友との交流を通して子育ての多様に触れ、「こうあらねば」という狭い思考から脱却できた経験を持っている。また、困難を抱えながらも、たくましく子育てしている彼女たちに勇気もらっている。第3に、子育てという共通目標に向かって共に歩む中で「言語や文化の違いがあっても友情を育むことは可能だ」と確信している。以上が、就学前子育て当事者の筆者ら3人が「実践者」となった動機である。

金山は、「子育て中の親たちが子どもとともに集まって遊んだり、学習や情報交換をしたり、日頃の子育ての悩みをお互いに相談し合うことを目的とし、支援する者と支援を受ける者という役割ではなく、同じ子育て中の親同士がサークル活動を通して、お互いに支え合っている子育てのグループやその活動」を、「子育てサークル」と定義している[金山2008：116]。

したがって、イクリスが本来目指しているのは、NPOというより多文化共生の理念に基づいた「子育てサークル」と言った方が具体的かも知れない。

しかし、これまで述べてきたように、既存の子育てサークルは参加者の圧倒多数が日本人保護者である。そこには何か理由があるはずで、新たな仕組みがなければ言語や文化の差異を超えて多様な保護者が参加できる子育てサークルは実現できないだろう。その理由を探り、新たな仕組みを生み出すには、既存の子育てサークルを含め居住地域の子育て当事者となつたり、対話を深めていく必要がある。同時に、多文化共生の推進や子育て支援に携わる人々を中心に、多様な人々との連携・協働も重要である。これは、子育てサークルが横につながり、地域の市民活動や行政、専門機関と連携して活動する「子育てネットワーク」としての機能である[金山2008：116]。

こうした多文化共生の理念に基づく子育てサークル・子育てネットワークはいかにして形成できるのか。そのプロセスの明示化をイクリスの研究テーマとして提案してくれたのは、Cさんである。

かくしてイクリスは、既存の子育てサークル・子育てネットワークの枠に収まらないNPOとしてスタートを切った。各自が居住地域で実践の場を持ち(筆者=東京都新宿区、Cさん=東京都世田谷区、Mさん=千葉県市川市)、姉妹団体として互いに協力したり、適宜合同事業を行ったりすることを方針にした。全体像を図-2に示す。

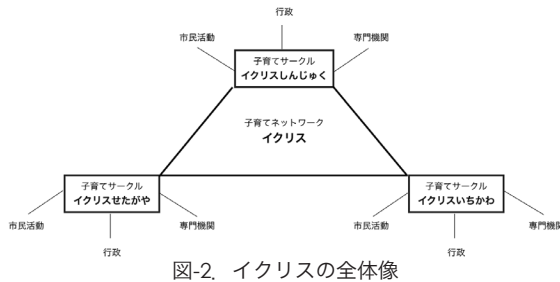


表1. イクリス事業実績 (2014年5月発足～2015年3月)

イクリスしんじゅく	イクリスせたがや	イクリスいちかわ
2014年7月25日 多文化子育て語学カフェ 2014年8月29日 多文化子育て語学カフェ 2014年9月23日 多文化子育て語学カフェ 2014年10月22日 にほんごままかふえ→中止 2014年11月15日 にほんごままかふえ 2014年12月13日 にほんごままかふえ 2015年1月21日 にほんごままかふえ→中止 2015年2月11日 にほんごままかふえ 2015年3月11日 にほんごままかふえ	2014年7月13日 多文化ファミリー交流パーティー 2014年10月26日 ハロウィンパーティー 2014年12月23日 X'masパーティー 2015年2月1日 節分パーティー	2015年2月4日 親子DE多文化交流 ※市川市男女共同参画課の主催事業に ファシリテーターとして協力
2015年1月7日 外国人ママを応援する支援者交流会 ※多文化社会コーディネーター養成講座個別実践研究		
イクリス		
2015年2月28日 多文化共生子育てフォーラム※明治大学山崎啓造研究室と共催		



このような体制のもと、2014年5月の発足から2015年2月までの10か月間に実施した事業を表-1にまとめた。

次章からは、このうち筆者が中心となって取り組んできた「ままかふえ<sup>7</sup>」（第3章）と「支援者交流会」（第4章）について省察する。

### 3. にほんごままかふえ

本章では、コーディネーターとしての視点を持ち合わせずに企画・運営してきた「ままかふえ」について、反面教師として省察する。ここで得た教訓やヒントによって、取りも直さずコーディネーションの必要性を実感できたからである。まずはプログラムの概要を以下に示す。

内容：多言語またはやさしい日本語による読み聞かせ、歌、トーク

対象：妊娠中または就学前の子をもつ保護者

日時：月1回、水曜日10：30～11：30

場所：大久保スポーツプラザ児童遊戯室(JR高田馬場駅から徒歩約15分。エレベーター・エスカレーターのない新大久保駅からは徒歩約8分)

会費：無料

申込：不要

広報：facebook (<http://www.facebook.com/icris.shinjuku>)

チラシ(日本語、中国語、韓国語、英語、タガログ語、タイ語、ミャンマー語)

口コミ(主に虹の会、筆者のママ友関係)

資金：新宿区社会福祉協議会 地域ささえあい活動助成金(4万円)

#### 3-1. 企画プロセスの省察

「ままかふえ」の企画プロセスとは、どのようなものだったのか。振り返ると、無意識ながらも、対象者の次に決めたのは「月1回」という開催頻度であったと思う。主な理由は、①小規模でもかたちある場をつくり、参加者の反応からニーズを探るため、②定期開催して認知度を高め、協働相手を募るためという2点だったが、そのプロセスは①場をつくる、②参加者を募る、③参加者の中から運営者を募る、④参加者、運営者が増えたらプログラムを充実させるという流れであった。

しかし、乳幼児連れでは毎月参加するだけでも大変なエネルギーを要する。そのため、周囲のママ友はもちろんCさん、Mさんに対しても「参加してもらっただけで御の字」という気持ちが働いてしまい、企画・運営への誘いに遠慮がちだった。また、就学前

子育て当事者以外の人との協働は、筆者自身がその日その時の子どもの状況により行動を制限されるため、積極的になれなかった。結果、各回ごとに絵本を読んでもくれたり手遊びをしたりしてくれる参加者はいたものの、会場手配や広報宣伝、プログラムの検討を共にしてくれる運営のパートナーまでは増やせず、独り相撲から抜け出せなかった。

就学前子育て当事者だけで、多文化共生の理念に基づく子育てサークル・子育てネットワークの企画・運営を進めるのは極めて難しい。集客に目を向ける前に、まず「運営者のコーディネーター」から始めるべきだった。

### 3-2. 参加者の捉え方に関する省察

参加者の捉え方についても、コーディネーターとしての視点があるか否かでプログラムのあり方がまったく変わってくる。

筆者は当初、参加者を「プログラムの提供相手」と捉え、「いかに引きつけるか」が実践課題であると考えていた。毎回とも筆者のママ友が数名ずつ参加してくれたが(表-2)、実はイクリスメンバーを除きリピーターは1人もいない。

表-2. 「にほんごままかふえ」参加者実績

	14/7/25	14/8/29	14/9/23	14/11/15	14/12/13	15/2/11
日本人保護者	6	4	8	1	1	2
日本ルーツの子ども	5	3	7	1	1	2
外国人保護者	2	2	1	2	2	1
外国ルーツの子ども	2	2	1	3	3	2
合計	15	11	17	7	7	7
国籍	日本 韓国	日本 ドイツ バングラ デシュ	日本 バングラ デシュ	日本 韓国 中国	日本 中国	日本 韓国

悪天候、子どもの風邪、2人目の妊娠、一時帰国など、リピーターしない理由は様々だったが、筆者としては①会場が乳幼児連れで行きにくい立地であること(条件の合う公共施設がこししか無かった)、②「読み聞かせ、歌、おしゃべり」というプログラムに対する参加者のニーズが薄いことが最大の理由ではないかと見ている。

参加者はプログラムの提供相手であるだけでなく、協働相手と捉えることもできる。プログラムありきで集客するのではなく、まず「どのような参加者と、どのような協働・創造のプロセスを描いていきたいのか」という意図を明確にする必要性を痛感した。

### 3-3. 多文化共生の理念に基づく子育てサークルとは

企画・運営は孤軍奮闘だったものの、各回とも和やかな雰囲気で開催者同士の会話が弾み、楽しいひとときを過ごせた。また、場のあり方を模索していく上でも、数多くのヒントを得られた。そのうち3項目を以下にまとめる。

#### (1) 通じる通じないは二の次

フルタイムでパートをしながら5歳の男の子を育てるバングラデシュ出身のRさん(虹の会学習者)が参加してくれた回には、イクリスいちかわMさんのつながりで日本人のNさん親子ほか2組が来場。Nさんは自作のパネルシアターの披露までしてくれた。

Rさんは日本語がほとんどできない。それでも、Nさんたちは「お子さん何歳ですか」「バングラデシュって、どこにあるんだっけ。何語を使うの」と、親しみをこめてどんどん話しかけてくれた。筆者は、それを媒介語の英語や、やさしい日本語に直して伝えた。また、Rさんは洋裁が得意でサリーも作れること、家族ぐるみでピクニックをした時には美味しいバングラデシュ料理をご馳走してくれたことも言い添えた。Nさんたちが「わあ～素敵」と盛り上がると、Rさんも「日本人のママ、もつとすごい。私、尊敬します」と、リラックスした様子で会話を楽しんでいた。

高木は、「メッセージ全体の印象を100%とした場合に言語内容の占める割合は7%、音声と音質の占める割合は38%、表情としぐさの占める割合は55%」というメラビアンの法則を引き、「我々が対面対話によって伝え合うものは、言語コミュニケーションよりも非言語コミュニケーションによる方が大きい」と述べている[高木2005: 26]。通じる通じないは二の次で、まずは笑顔で話しかける。その積み重ねが「知りたい、伝えたい」という気持ちを高めてくれる。これは、「多文化共生の理念に基づく子育てサークル」のあり方を考える上で非常に重要な視点ではないだろうか。

#### (2) 音楽を活用して言語の壁を超える

中国人のSさん(日本語初級<sup>8</sup>)が参加してくれた回では、「大きな古時計」の中国語の歌詞を配って全員で歌ったところ(写真-1)、拙いながらも中国語で歌う筆者にSさんが目を丸くして驚き、「すごい、すごい」と感心してくれたのが印象的だった。

外国人保護者の母語を取り入れたプログラムは、日本人保護者との間の言語の優劣関係を取り払い、多様性への関心を高める意味で非常に有意義だと思われるが、通訳翻訳の人材なしには出来ることに限りがある。しかし、簡単な絵本や童話であれ



写真-1. 第4回「にほんごままかふえ」

ば、言葉の意味だけにとらわれなくても楽しめるので、プログラムとして大変有効だと感じた。

### (3) 1人の女性に戻れる場所として

日本語上級の中国人Kさん、その友人で日本語初級の中国人Yさんが来てくれた回は、日本人は筆者1人だった。用意した絵本もそこそこに、2人の中国語弾丸トークに花が咲き、筆者自身が言語マイノリティの立場をたっぷり味わえた。

また、普段は化粧つきのないKさんが、「これ、恥ずかしいけど見ますか」と言っ  
て中国の写真館で撮影したという写真を差し出した時は驚いた。トップモデルさながらの派手なメイク、それも大胆なセミヌードだったからである。中国では今、自分撮りが流行りらしい。ともあれ「日本語学習者」でも「母親」でもなく「女性」としてのKさんの素顔を見せてもらえたようで嬉しかった。

小川によれば、「母として」の自分の肯定的な実感(子どもを産んで良かった、子育てが楽しい、子育てしている自分が好きであるといった感覚)があるか否かは、「子として」「妻として」「働く女性として」といった他の役割での肯定的な実感に影響を受けているという[小川2014: 85]。筆者が目指しているのはまさに、子育てに奮闘する日本人母親と外国人母親が「1人の女性として」互いに好感を持ち、尊敬し合えるコミュニティづくりである。

こうして、目指すべきコミュニティ像が少しずつ浮かび上がる中で、筆者は「イクリスしんじゅく」の実践を①運営者のコーディネート、②参加者のコーディネート、③場のコーディネートという順序で組み立て直すことにした。

## 4. 外国人ママを応援する支援者交流会

運営者のコーディネートに向けて、まず身近な人たちと課題意識・ノウハウ・目標を共有する場の必要性を感じた。そこで企画・実施したのが「支援者交流会」である。

### 4-1. 概要

支援者交流会の概要は、以下の通りである。

日時：2015年1月7日(水) 10:00～12:00

場所：しんじゅく多文化共生プラザ

参加者：9名 ※筆者が個別に参加を呼びかけ

- ・虹の会代表 Iさん
- ・新宿区立大久保図書館(以下、大久保図書館)館長 Tさん
- ・地域子育て支援センター<sup>10</sup>二葉(以下、二葉)職員 Oさん
- ・多言語情報流通デザイン等の実践研究者 Kさん
- ・コミュニティ通訳の実践研究者 Nさん
- ・他市の親子日本語サークル主宰者 Fさん
- ・イクリスせたがや代表 Cさん
- ・イクリスイちかわ代表 Mさん
- ・イクリスしんじゅく代表 筆者

#### 4-2. 人選のねらい

支援者交流会の最大のねらいは、同じ新宿区内で活動する「虹の会」「大久保図書館」「二葉」の3者をつなぐことだった。

第1章でも触れた通り、筆者はイクリス発足とほぼ同時に、虹の会にもボランティアとして参加し始めた。そこには、日本語ができない外国人保護者は大勢参加しているものの、就学前子育て当事者のボランティアは筆者を含めて2人しかおらず、地域との連携や協働は行われていない現状に課題意識を抱いた。一方、多文化サービスに熱心な大久保図書館館長のTさんは、多様なNPOや行政、専門機関と意欲的につながり東奔西走している「動く図書館」のような人である。しかしそのTさんでさえ、日本語ができない外国人保護者の集客に難しさを感じていた。そこで、目と鼻の先で活動しているIさんとTさんをつなげば、新たな協働を生み出せるのではないかと考えたのである。

また、二葉では「ホームスタート」<sup>11</sup>を実施している。そのオーガナイザーであるOさんに加わってもらうことで、虹の会や大久保図書館を足がかりに外国人保護者の地域参加を促す仕組みを生み出せるのではないかと考えた。他市で家庭支援センターと連携し親子日本語サークルを主宰しているFさんには、6年間のプロセスを紹介してもらい、多言語情報流通やコミュニティ通訳に関する豊富な知識・経験・人脈をもつKさんとNさんには俯瞰的な観点から対話に参加してもらい、つながりを探ってもらおうと考えた。

#### 4-3. 懇談の流れ

進行役の筆者は、冒頭の挨拶で「多文化共生推進の場と子育て支援の場の縦割り」を問題意識として提示し、懇談のテーマが「各現場の情報、ノウハウ、問題意識の共有」

であることを確認した。自己紹介は①名前、②所属、③交流会で話したいことにしぼって1分程度で簡潔に述べてもらい、本題に入ってから①これまでの取り組み、②外国人保護者との接点、③培ってきた情報・ノウハウ、④一番の課題、⑤目標(知りたい情報、今後つながりたい人など)を5分程度で話してもらうよう促した。事前にメールでも伝えておいたため、全員が要点をしぼって語ってくれ、短時間ながら内容の濃い対話ができ(写真-2)。



写真-2. 外国人ママを応援する支援者交流会

#### 4-4. 共有された課題・視点

大久保図書館のTさんと二葉のOさんから「日本語ができない外国人保護者の参加・利用」が一番の課題として挙げられた。

Tさん：日本語のおはなし会を(日本人だけを対象とせず)外国人が日本語に触れる機会として打ち出し始めたが、宣伝がうまくいっていない。また、小さい子向け(0～3歳児)のおはなし会は、日本人保護者には定着しているが、やはり外国人保護者が来ていない。もっともっと外国人保護者が参加しやすい雰囲気をつくりたい。

Oさん：日本語ができない外国人保護者にホームスタートをどう使ってもらうかが課題。これまで韓国、モンゴル、フィリピン、ロシア、中国出身者の利用実績があるが、すべて日本語ができる人である。

この課題をめぐっては、①情報の届け方、②通訳翻訳人材の確保、③参加・利用しやすいよう工夫するなどの課題があるが、このうち①について対話が深まった。共通して出たのは「保育士、幼稚園教諭、助産師、保健師、エスニックコミュニティとの連携が不可欠」という視点である。

Tさん：図書館の取り組みを知った保健センターから「外国人母親は言葉が不自由で孤立している。多言語の催しはすごく喜ぶと思うので案内したい。ぜひチラシを分けて欲しい」と申し出をもらった。保健センターとのつながりは全然頭になかったが、そういう広がりもあるのだと気づかされた。

Fさん：保健師から以前、産後の孤立から鬱病になり、自虐行為をしている外国人母親を紹介された。そういう人の発見は(家庭訪問できる)保健師しかできないので、色々な組織とのつながりは今後も重要だと思う。

Cさん：お世話になっている助産師さんに、多文化ファミリー向けクリスマスパーティーの話をしたところ、「いるわよいるわよ、これにピッタリな人」と言っ  
て産後ケアセンター<sup>12</sup>と連携し、あっという間に10人以上の外国人母親にチラシを渡してくれた。当日はそのうち4人が参加してくれた。

Mさん：「家で鬱々としている外国人のお母さんにこそ来てほしい」という、熱い思いをもつ男女共同参画センターの職員と、多文化交流イベント(主催：同センター、協力：イクリスいちかわ)の宣伝方法を検討した際、「やはり保健センターが鍵だろう」ということで、保健師とすぐ連携をとってくれた。行政同士だからこそスムーズに連携ができるのかもしれない。

そうした人々と連携して情報を届ける際に、重要な視点とは何か。多言語情報の流通に詳しいKさんの発言に一同が共感した。

Kさん：ある外国人女性から言われた「情報はぬくもりのある関係性の中でしか届かない」という言葉が、今も心に残っている。必ずしも多言語情報がなくても、伝えられることはある。(中略)ちょっとした会話の中で情報を伝えていくような「場のデザイン」が重要。

Tさん：近隣の幼稚園や保育園に度重ねて多言語おはなし会の宣伝にまわったところ、非常に効果があった。やはりフェイス・トゥ・フェイスの宣伝、特に幼稚園・保育園は大事だと感じた。

Nさん：孤独感が強い、誰が信頼できるか分からないという状況が多い外国人にとってはなおさら、一人ひとりを見据えた温もりのある情報の伝え方が重要だと感じた。

また、IさんとFさんからは「子育て当事者に運営者として参加してもらう難しさ」について言及があった。

Iさん：外国人保護者に情報を届ける際、例えば安藤さん(筆者)のような同じ境遇の人を介した方が、より伝わるのかなと思う。でも、外国人保護者の学習者は多いが、子育て中のボランティアはすごく少ない。子育て中のボランティア

にも来てもらうには、どうしたらいいのだろうか。また、外国人保護者と言っても一括りには出来ない。特に幼児の場合、1か月の子と6か月の子では対応が違うし、親同士の話題も全く変わる。国籍や、配偶者が日本人であるか否かによっても、共感点がすごく違う。何とか横のつながりを持ってほしいが、どうしたら、その仕掛けができるだろうか。

Fさん：今年で6年目だが、運営者は自分1人。今まで、参加者の中から一緒に運営してくれる人を募ろうと思ったが、子どもがいると病気になるったり、昼寝の時間もあって、なかなか参加できない。どこまで頼んでいいのか見えない時がある。

この点については、Cさんが子育て当事者の立場からコメントした。

Cさん：周囲には色々な能力を持ちながら持て余しているママ友が大勢いる。主催したイベントでは、そういうママ友が生き生きと手伝ってくれた。楽しければ絶対集まってくれると思う。自分自身「私が楽しければ、みんなも楽しいだろう」という気軽な気持ちで取り組んでいる。

そして、「日本語にとらわれず、外国人保護者がありのままで楽しめる、安心できる場づくり」という視点も挙げられた。

Fさん：当初は「子育てで悩んでいること」「今まで一番幸せだったこと」などテーマ別のおしゃべりを試みたが、来日歴の浅い参加者は会話に入れなかった。そこで、日本語で活動するというこだわりを捨て、母国のダンスや料理をレクチャーしてもらうなど「参加者が得意でイニシアチブをとれること」を活動の中心に据えたところ、参加者が増えてきた。

Nさん：通訳の経験上「母語で傾聴してくれる人がいるだけで悩みの半分は解決されている」と感じることもある。外国人の子育てをサポートする方策として、彼・彼女らが素の自分になって話せる場づくりも重要だと思った。

以上が、支援者交流会で共有された内容である。

#### 4-5. 成果と課題

自身をコーディネーターとして捉え直して臨んだ支援者交流会では、参加者全員が



立場の違いを超えて、課題や視点を共有できた。そして、本稿の執筆を進めるべく、改めて支援者交流会の記録(テープ起こし原稿)を熟読する中で、ある思いが脳裏に浮かんできた。「そうだ。私はこれまで『子育てサークル』をつくることに必死になっていたけれど、そうではなく、支援者交流会に参加してくれた人たちの現場をつなぎ、そこに日本人保護者と外国人保護者が『参加』『協働』『創造』できる循環を作り出していく取り組みを、イクリスしんじゅくの活動とする道もあるのではないだろうか」。そう気づいた瞬間から、様々なアイデアが浮かんできた。

#### (1) 虹の会と大久保図書館をつなぐ

一つは、虹の会で「図書館の活用法」をテーマにした授業を行うということである。図書館の基本的な説明をした上で、利用登録、資料検索、貸出しの方法を学び、実際に大久保図書館を訪れて実践する。おはなし会などのプログラムに参加してみるのも良い。早速Iさんに提案すると「実は、私も支援者交流会で図書館の話聞いて、ぜひやってみたいと思っていたところですよ」と快い返事が届いた。この企画は、定例会で早速検討してもらうことになった。

#### (2) 虹の会と二葉をつなぐ

ホームスタートについても、Iさんから「大事な情報なので、ぜひ虹の会で共有したい」という前向きな反応もらった。ただし、日本語ができない外国人保護者がホームスタートを利用できる体制がまだ整っていないというOさんの話もあり、段階を経た準備が必要である。例えば、ホームスタートで家庭を訪問するボランティア(ホームビジター)と虹の会の学習者が懇談し、「日本語ができない外国人保護者がホームスタートを利用する意義」について話し合うプログラムなどが考えられる。今後、Iさんと共にOさんを訪ねて具体的な相談をしたい。

#### (3) ネットワークのさらなる広がりをめざして

イクリスしんじゅくとしては、2016年3月13日、外国人保護者向け「お弁当作り講座」を大久保図書館と共催することも決定した。約1年かけて運営、プログラム、広報宣伝の準備を進めていく。その中で、保育士・幼稚園教諭・保健師・助産師・エスニックコミュニティのキーパーソンなどと、さらなるつながりをつくりたい。

#### (4) イクリスメンバー間の連携

昨年度の反省も踏まえて、2015年度は月1回イクリスの定例会を持ち、それぞれの

実践(しんじゅく：上記3項目、せたがや：「多文化ファミリー交流会」、いちかわ：「親子DE多文化交流」への協力)を進めることになった。合同事業は、「支援者交流会」改め「実践者交流会」と「第2回 多文化共生子育てフォーラム」の開催を予定している。

## 5. 就学前子育ての場における多文化社会コーディネーターの必要性と役割

本章では、なぜ就学前子育ての場で多文化社会コーディネーターが必要なのか、どのような役割が求められるのかについて見解を述べる。

まず、第1章から第4章で述べてきた内容を踏まえると、以下の2点に整理できる。

- ①就学前子育ての場で、日本人保護者と外国人保護者が接触する機会が極めて少ない。  
＝両者が出会い、交流する場づくりの必要性
- ②多文化共生推進の場と、子育て支援の場が縦割りになっている。  
＝横断をさす連携・協働の仕組み、プログラムの必要性

次に、「就学前」という時期と、「保護者同士」という関係性に焦点を当てる意義について、説明を加えておきたい。

### 5-1. なぜ「就学前」なのか

筆者が「就学前」にこだわる理由の一つは、子どもの言語形成の最重要期が就学前であるという点である。事例を一つ挙げる。

2014年12月から2月にかけて、3-3.で紹介したRさんは、息子のA君を連れてバンングラデシュに一時帰国した。日本に戻ってきたRさんと久々の再会を果たした時、A君にも「バンングラデシュはどうだった」と尋ねたところ、即座に「つまらなかった。バンングラデシュきらいだもん」という答えが返ってきた。「どうしてそう思うの」という筆者の問いかけに「だって日本語じゃないし、保育園ないし、ガチャポンもないしさあ」とA君。Rさんいわく「行きたくない」「早く帰ろう」と、ずっと抵抗していたようだ。その後もバンングラデシュのここが嫌だ、日本のここが好きだと早口で語るA君にRさんは「A、たくさん話します。私よく分からない」とつぶやいた。その笑顔の奥でRさんはこの事態をどう受け止めているのだろう。あどけないA君が発した残酷な一言に筆者の胸は否応無く締め付けられた。

Rさんの夫は同じくバンングラデシュの出身で、筆者も面識がある。Rさんより滞日歴が長く日本語も達者だが、夜間に働いており、A君との接触時間はRさんの方が長い。しかし、家庭内では現在、Rさんがベンガル語や片言の日本語で、夫が日本語で、A

君に話しかけているという。

非国際結婚家庭における継承語教育について中島は「子どもが現地校に根を下ろすにつれて、社会的価値の高い学校言語を『自分の言語』として受け入れ、家庭に持ち込む傾向がある。親が母語で語りかけても、答えはすべて現地語という状況がよく起こる」として、「このような状況の中でなんとか2言語のバランスをとるためには、親が徹底して継承語を家庭で使用すると同時に、学校の教師が率先して、継承語の価値を認めて家庭での継承的学習を奨励することが肝要である」[中島2010：26]と指摘している。また、言葉を習得するために母語(初めてのことば)が果たす役割の重要性については次のように述べている。

母語の発達がしっかりしていることが2番目のことばの習得の成功の鍵ですし、また、2番目のことばの学習に成功するならば、3番目、4番目の外国語の学習も速くなります。そして母語が中途半端であると、その次のことばも中途半端になる傾向があります。[中島1999：11]

初めてのことばは、まず「親」のことばで、「親」と「子」の絆をつくります。またことばを使って親以外の周囲の人と交流することを学びます。ことばを使って自分の気持ちや意志を人に伝えることを学びます。またことばを使って「考える」ことも学びます。その上にトータルな生活体験を通して、親の文化の担い手としてふさわしい行動パターンや価値観も学びます。親の文化の担い手としてのアイデンティティも身に付けます。つまり、初めてのことばは子どもの人間形成に大変大事な役割を担っており、その子のルーツと言えるものなのです。[中島1999：14-15]

以上のことから、母語・母文化の基礎作りで一番大切な時期は「ゆりかご時代」(0～2歳)と「子どもべや時代」(3～4歳)であるとしている[中島1999：15]。

実は、筆者の夫も結婚直前までの約6年間、虹の会のボランティアと、外国ルーツの子どもたち(小学校高学年から中学生)を対象とした学習支援ボランティアをしていた。その中で、親と意思疎通できない寂しさや苛立ちを募らせる子、やむにやまれず自虐行為に走る子、継承語も日本語も未確立のまま育った結果、学習言語の抽象概念がどうしても理解できず、進学できなかった子と触れ合ってきた夫は、外国人保護者と周囲の人々が、中島のいう「ゆりかご時代」「子どもべや時代」に、子どもの言語形成に関する理解を深められる機会が必要だと力説する。

なお、A君の通う子ども園では、連絡帳はルビなしの日本語であると聞いた。ある

日の虹の会でRさんは「私、先生、聞きたい。A、友だち、いじめてない？ごはん、食べた？ But、聞く、できない」と筆者に打ち明けてくれた。こうした状況からは、子どもの言語形成や親子の意思疎通に関して、子ども園とRさんが課題を共有しているとは想像し難い。

## 5-2. なぜ「保護者同士」なのか

次に、日本人保護者と外国人保護者をつなぐ必要性について述べる。

第1章では日本人保護者と外国人保護者が接触する機会がいかに少ないかを述べてきたが、それは単なる偶然ではない。既存の就学前子育て支援施策は日本語話者のみを対象に設計されており、日本語ができない外国人保護者の子育て支援ニーズは外国人支援団体や外国人相談窓口、エスニックコミュニティなどがもつぱら受け皿となっているのである。

こうした状況下では、日本人保護者は至極当然に「日本語話者だけが居る場所」で就学前子育て期を過ごすことになる。ママ友をつくるにも子育て情報を得るにも、言語や文化の差異を乗り越えるべく試行錯誤する必要には迫られない。日本語ができない外国人保護者が日々どのような思いで子育てをしているのか、関心を抱き想像をめぐらせる機会もない。つまり、「対話」「共感」が芽生える土壌がないのである。

日本に住む多文化な保護者を対象に「多文化子育て調査」<sup>13</sup>を実施した山岡は、言葉やさまざまな問題で子育て付き合いに積極的ではない母親の子どもは、保育園にも慣れておらず、日本人とも同じ国の子どもとも遊べない状況にあると報告している。また、母親自身も、「いじめ」に関する不安や「子どもが仲良く遊べるか」ということを心配している点が明らかに多いという[山岡2007: 18-19]。他方、多文化な背景を持つ母親の中でも子育て付き合いに積極的な人は、「子どもが保育所生活に慣れるのに役立つこと」として、「先生が私と親密に連絡をとってくれた」「日本人の保護者や子どもが話しかけてくれた」など、周囲の人々を評価する回答を記述していた。これらの結果を踏まえて山岡は、「保護者も保育者も忙しい日常にあっても、お互いの意見を交し合う時間と思いを伝える工夫や努力を積み重ねることで、相互理解の道が開けるように思います」と述べている[山岡2007: 25]。

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターでは、多文化社会コーディネーターを「あらゆる組織において、多様な人々との対話、共感、実践を引き出しつつ、「参加」→「協働」→「創造」の循環を作り出す機能を駆使しながら、すべての人が共に生きることのできる社会に向かってプロジェクト(活動)を展開・推進する役割を担う専門職」と定義している[杉澤2009: 20]。多文化社会コーディネーターには、就学前子育て

の場を、多様な保護者が集い(参加)、対話の中で共感を育み、共に子育て(協働)できる場へと変革していく(創造)役割が求められているのではないだろうか。

### 5-3. なぜ「対話」「共感」が必要なのか

ただし、就学前子育ての場において保護者同士は、同僚や取引先、級友などとは違い、出会うも出会わないも、近づくも距離を置くも、個々人の自由に任されている。「関係の希薄さは自然な成り行きによる結果なのだから仕方ない」という見解もあるだろう。

筆者は同じ新宿区内に住む日本人のママ友に、外国人のママ友も欲しいと思うか否か尋ねてみた。その回答は、「外国人だからママ友になりたい／なりたくないという意識はない。たまたま何かのきっかけで仲良くなったのが外国人だったということは、あり得るかも知れない」というものだった。

何のための「対話」「共感」なのか。コーディネーターの必要性を説く上でも、多文化共生社会をめざす目的を論じる上でも、目的観の明示化は極めて重要である。筆者には、本稿執筆時点で、職務としてコーディネートにあたる義務は一切ない。にも関わらず、何のために「対話」「共感」を引き出そうとしているのだろうか。

それは筆者自身が、他者との「対話」「共感」によって無限に視野が広がる喜び、新しい自分と出会える楽しさを実感しているからだと思う。また、子育てという人類普遍の行為を通して日本人と外国人に共通する「人間性」を見つめていくことが、地道なようで平和の文化を支える基盤になると考えるからである。

池田とドウは「対話は『人間になる』ための方法である」という視点を提示している。  
[池田・ドウ 2007: 78]

ドウ 対話方式というのは、単に同一性や均一性を求めることではありません。それは「人間になる」ための豊かで効果的な方法なのです。私たちは、異なった生活様式との出会いによって、「聞く」技術や思いやりの倫理観、自己発見の感覚を磨いていくのです。

池田 おっしゃる通り、対話の海の中でこそ、人間は「人間になる」。対話とは、“他者を変える”というよりも、まず“自分を変える”壮大な挑戦と言えるでしょう。

「支援者交流会」でCさんは「楽しければ(子育て当事者は)絶対に来ると思う」と述べていた。子育て当事者に「新しい自分と出会える楽しさ」をどう伝えていくのか。筆者が多文化社会コーディネーターとして感じている、いま最も大きな課題である。

## おわりに

本稿では、就学前子育ての場における多文化社会コーディネーターの必要性と役割について論じてきた。日本人保護者と外国人保護者の間にある「見えない壁」を可視化し、その壁を取り除く方策として、多文化共生を推進する場と、子育て支援の場をつなぐ重要性を指摘した。双方の課題意識や情報、ノウハウをつなぐことで新たな協働の道が開けるという実例を示すこともできた。就学前子育て当事者としての実践の記述は希少であり、多文化共生社会に向けた様々な場で就学前子育て当事者の参加・協働・創造を促進していく上でも、意義があるのではないだろうか。

また、日本人保護者と外国人保護者が共に支え合い子育てしていくコミュニティづくりの鍵は「自己変革への積極的な志向」であるという視点を示した。多様な保護者から、この志向をどう引き出していくのか。その方策については、今後の大きな課題である。

筆者の実践は、まだ緒についたばかりである。次の1年も、4・5で示した今後の実践を通して地域の様々な人々と協働しながら、「誰もが安心して子育てできる地域づくり」をめざして省察を重ねていきたい。

---

### [注]

1. 東京都が独自に市区町村別に設置している地域の子育て支援拠点。
2. 2015年3月1日現在、新宿区の人口は327,618人。そのうち外国人人口は36,093人である。
3. 牛込保健センターが区内4カ所の保健センターを統括して回答。外国人保護者を基準とした統計がないため、外国人乳幼児の参加状況を尋ねた。
4. 本稿では、自然なスピードで会話が成り立つ、行政からの書類を自力で理解し、記入できる人を「日本語上級」と表現する。
5. 本稿では、①ゆっくり、はっきり、短い言葉で話す、②主語と述語を1つにする、③日本人の小学生が分かる程度の単語を使うなどの配慮をした日本語を「やさしい日本語」と表現する。
6. 読み聞かせサークルには区内で転居するまでの約10か月間、運営メンバーとして携わった。
7. 「多文化子育て語学カフェ」という名称を、第4回から「にほんごままかふえ」に改名した。
8. 本稿では、ひらがな・カタカナがすすすらと書けない、簡単な表現の会話でも時折通じないことがある人を「日本語初級」と表現する。
9. 支援者交流会は、多文化社会コーディネーター養成講座個別実践研究のモニタリングも兼ねて実施した。
10. 特別区を含む市区町村が設置している地域の子育て支援拠点。
11. 未就学児が1人でもいる家庭に、研修を受けたボランティアが訪問する家庭訪問型子育て支援。導入国では、有奸な虐待一次予防対策の一つとして位置づけられている。週1回2時間程度、定期的に約2～3ヶ月訪問し、滞在中は友人のように寄り添いながら傾聴(相談事を受け止める)や協働(育児や家事と一緒に行動)等の活動をする。

12. 母親と赤ちゃんが一緒に過ごせる、出産後の育児支援を目的とした宿泊型ケア施設。看護師、助産師を中心に、臨床心理士、産後ケアリストなどの専門職が24時間体制で産後ママのケアにあたる。
13. 母子保健学(森本恵美子)、医学(谷口正子)、幼児体育学(朴淳香)、社会調査と心理学(山岡テイ)の専門分野を持つ4人の学際的チームによる調査。65の国籍、2002人から回答を得ている。

#### 【文献】

- 池田大作 ドウ・ウェイミン, 2007, 『対話の文明—平和の希望哲学を語る』第三文明社.
- 一般社団法人日本産後ケア協会 ホームページ <http://sango-care.jp/index.html>
- 小川晶, 2014, 『保育所における母親の支援—子育て支援をになう視点・方法分析』学文社.
- 金山美和子, 2008, 「子育てサークル・子育てネットワーク」大豆生田啓友・太田光洋・森上史朗編『よくわかる子育て支援・家族援助論』ミネルヴァ書房.
- 新宿区ホームページ「新宿区の人口」, [http://www.city.shinjuku.lg.jp/kusei/index02\\_101.html](http://www.city.shinjuku.lg.jp/kusei/index02_101.html) (最終閲覧 2015年 3月25日)
- 杉澤経子, 2009, 「多文化社会コーディネーター養成プログラムづくりにおけるコーディネーターの省察的実践」『シリーズ多言語・多文化協働実践研究別冊1 多文化社会に求められる人材とは?』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター.
- 高木幸子, 2005, 「コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割」『早稲田大学大学院文学研究科紀要. 第1分冊』早稲田大学大学院文学研究科編.
- 多文化子育てネットワーク ホームページ <http://www.tabunkakosodate.net/japanese/report.html>
- 中島和子, 1999, 『言葉と教育』財団法人・海外子女教育振興財団.
- 中島和子, 2010, 『マルチリンガル教育への招待—言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房.
- ホームスタートジャパン ホームページ <http://www.homestartjapan.org>
- 山岡テイ, 2007, 『違いを認め、大事にしたい—多文化子育て—海外の園生活・幼児教育と日本の現状』学習研究社.

